

全道大会には、男子1チーム4人が参加し、全道2位（優秀）の結果を残しました。
参加メンバーに、出場の感想を書いてもらいましたので、ご一読ください。

感想1

今回の大会は私にとって、最初で最後の全道大会でした。この大会は、楽しく過ごせて悔いの残らないものとなりました。

この大会にかける思いは、1ヶ月ほど前に行われた地区大会に遡ります。全道大会出場へ向けて臨んだ地区大会では、全道大会出場の権利を得たものの、1位をとることができませんでした。この悔しさをバネにして地区大会の悔しさを晴らすために、全道大会までの期間は、地区大会よりも力を出して準備をしていました。

初めての全道大会だったので不安な気持ちになって、心の余裕がない状態で大会1日目を迎えましたが、大会での四日間は、その気持ちとは裏腹にとっても早く過ぎてしまいました。2日目、3日目の登山は心が折れそうになった時もありましたが、なんとか踏ん張って登りきることができました。努力の成果が表れたのか、結果は全道2位で終えることができました。

この結果は自分のことを支えてくれた3人の仲間のおかげであり、また他の部員や顧問の先生方の支えがあったからこそ得られた結果だと思いました。ここまで頑張って来られた達成感と、日々誰かに支えてもらっていたことの実感を得られ、思い出の残る大会となりました。（SN）

感想2

危うげなしに、とはいかなかった地区大会ではあったが、1年生の夏合宿以来の大雪に、胸踊る思いだった。開会式前のホテルのロビーで味わった、あの全道大会特有の懐かしい高揚感は忘れられない。

自分は大会を通して、「山の背景知識や下調べは登山の楽しみを何倍にもするものだ」と学んだ。視界に入る草花の名前がわかる、脳内の思い描く山々と実際の景色が一致していく喜び。山に対して自発的にとでもいおうか、真摯に山と向き合ったからこそ得られる感覚は、自分は今ここにいるということのを再認識させてくれる、気持ちいいものだ。

その他にも、ドキドキしながら占拠したダイイチの電子レンジ、男4人で見て回ったファーム富田など、山での体験はもちろん、この大会自体が小旅行のようで、何とも言えない楽しさがあった。

大会運営に携わってくださった方々、先生方、後輩たち、そして3年間一緒に登ってきた4人の3年生に改めて感謝したい。（MK）

表彰式（優秀・2位）



テントサイトでの食事



感想3

今回大会に参加できたことが奇跡としか言いようがありません。大会の日時と感染者数の減少が重なり、制限が緩和されたときに無事に開催されたのですから。大会運営者の方々および当番地区の方々には感謝してもしきれません。安心安全な大会をありがとうございました。

さて、私たちが全道大会で意識したのはPDCAサイクルの循環です。これは計画、実行、評価、改善の4つの英単語の頭文字をとったもので、社会で広くつかわれています。帯広柏葉山岳部でも、代々受け継がれてきた資料と部報を元に計画を綿密に立てることができ、計画分野と装備は減点なしでした。私たちも成績を評価し反省したものをまとめたので、来年以降もこのサイクルを続け、蓄積すると必ずより良いものになると思います。

しかしやはり行動中の実技や突然のハプニングの対応が甘いと実感しました。例えば私は周辺の地理についてあまり知らず、行動中テストは全問不正解で大きく差をつけられました。安全な登山には、即時の判断行動が必要不可欠なので、解決する必要がある課題です。â

もちろん大会中楽しいこともあり、天気図で満点を取ったり、念願の旭岳山頂から見下ろしたりしたときは、努力が報われた気がして感無量でした。と同時により高い山に登りたいというアルピニズムの精神が芽生えてしまったことには触れないでおきます。

最後に、先生方、山岳部の皆様応援ありがとうございました。そしてダイイチの皆様、電子レンジを肉汁まみれにして大変申し訳ありませんでした。（KS）

感想4

全道大会を終えて、まずは準優勝を獲得できたことを素直にうれしく思う。正直4人ともまさか準優勝を獲得できるとも思っていなかったし、しばらく実感が湧かなかった。一昨年先輩方が全国に出場していたこともあり、多少の重圧もあったが、良い結果を残すことができ、一生忘れないような経験ができたと思う。特に、最後に4人で安全に山に登り、山を楽しめたことが、結果ももちろんだが、1番印象に残っている。

また、大会に限らず山岳部では、たくさんのことを学ぶことができたと思う。一番は、ありきたりかもしれないが、協力の大切さだろう。登山という競技の特性上、4人のチームワークが必要不可欠だ。自分がミスをしたら、だれかが助けてくれるといった、お互いの助け合いの結果が実よう結んだのだと思う。仲間には本当に心から感謝したい。

これから私たちは、隊長に言われたように「受験のインターハイ」に向けて努力するので、後輩たちにもインターハイに向けて日々頑張ってもらいたい。そしてこれからも「山恋」の精神を忘れないようにしたい。（TS）

